第 17 回：第 3 章−その 2−

未来に託すという“やりがい”

著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

かつての映画ライフと「この一本」の選定

TSUTAYA の「5 枚で 1000 円レンタル」というサービスはご存知でしょうか？私が大学生だった頃にそのようなサービスが始まった記憶があります。そのサービスを知ってからは，週末や連休の前日になると TSUTAYA に出向いて映画を 5 本レンタルして，返却期限に追われながら鑑賞するという趣味（作業？）が定着した記憶があります。一番よく観ていた時期は月に 20〜30 本，年間だと 200 本近くは観ていた計算になります。そんなにわか映画フリークの私ですが，今回のワークショップのテーマを渡辺先生から振られた時には内心，少し頭を抱えてしまいました。

というのも私が映画になにがしかの感銘を受ける時，それは素晴らしいストーリーや俳優の演技，カメラワークや音楽といった客観的に評価できうる要因よりもむしろ，自分自身の過去の経験や葛藤，当時の問題意識や将来への悩みといった自分自身の固有の要素と作品をリンクさせて，結果として感銘を受けることが多かったためです。つまり，私の感銘ポイントは「鑑賞した時点の私だったから」であり，私の感銘が他者にも同様にもたらされるかどうかは全く未知数だったためです。

私が勧めるこの一本：ペイフォワード-可能の王国-（2000 年公開）

そんな葛藤の中で考えた，私が勧めるこの一本は，「ペイフォワード-可能の王国-」という作品です。振り返ると，この映画が自分自身の臨床，というより対人援助を続けている大きな理由の 1 つになっているという実感があります。

本作のあらすじは，以下のとおりです。主人公はラスベガスに住むアルコール依存症の母と，家を出て行った家庭内暴力を振るう父との間に生まれた，少年トレバー。中学 1 年生（アメリカでは 7 年生）になったばかりの彼は，社会科の最初の授業で，担当のシモネット先生と出会います。先生は「もし自分の手で世界を変えたいと思ったら，何をする?」という課題を生徒たちに与えました。生徒達のほとんどは，いかにも子供らしいアイディアしか

提案できなかったが，トレバーは違いました。彼の提案した考えは，「ペイ・フォワード」。自分が受けた善意や思いやりを，その相手に返すのではなく，別の 3 人に渡すというものでした。トレバーはこれを実践するため，“渡す”相手を探します。仕事に就かない薬物中毒の男，シモネット先生，いじめられている同級生…。 いろいろと試みるものの，なかなかうまくいかず，「ペイ・フォワードは失敗だったのではないか」とトレバーは思い始めます。しかし，トレバーの気づかないところで，このバトンは次々に受け渡されて…。

ネタバレになるため詳細は書けませんが，この映画のラストを観て，幼少期から抱いていた「疑問」が氷解した思い出があります。私が小学生くらいの頃，なんでそんな話になったのか，文脈は失念してしまいましたが，看護師の母から「人を助けるのに見返りを求めてはいけない。見返りを求めない無償の愛（アガペー）が大切」という話を聞きました。聞いた当時は「見返りがないのに，なんで人助けなんてするんだ？意味ないじゃん。」などという疑問を抱き，釈然としませんでした。

それから十数年後，本作を鑑賞し，特にラストの展開を見届けている時，唐突に上述のエピソードを想起したのです。そして，映画内の「ペイフォワード」という行為とその結果（ラスト），さらに「見返りを未来に託す」という発想こそが，長年の疑問であった「見返りがないのに，なんで人助けなんてするんだ？」に対する回答のように視えたのです。私が幼い頃に抱いていた疑問の源泉は，「見返りを今・現在に求める」という考えだったのだと思います。もちろんそのこと自体は，とても自然で一般的な考えだとも思います。私が専門としている行動分析学においても，原則的に有機体の行動は後続する結果事象がその有機体にとって望ましく即時であるほど行動の生起頻度が高まる，一般的な言い方をするならば動機づけが高まるといった言説があります。しかし人間のような言語を使える有機体は，そういった即時の結果事象がなくても，すなわち，今・現在に見返りがなくとも，未来に望ましい結果事象があることで動機づけが高まることが示されています。

もちろん，賞賛やお金など比較的即時の結果事象は，対人援助を実践する私にとって大きな動機づけの 1 つであることは変わりません。また一般的にも言われているように，低賃金や重労働といった動機づけを下げるような要因が依然として多いことも現実です。ただそれでも，私自身が今もなお，現在進行形で対人援助の実践に立ち続けていられるのは，「ペイフォワード」から学んだ「見返りを未来に託す」という発想があるからこそです。動機づけに関して悩みがある対人援助職者はぜひ，ご覧いただくと良いかもしれません。

－つづく－